地理情報で表す神戸高専の５０年間の変遷

中尾幸一*

The Transition of Kobe City College of Technology Represent Geographical Information in 50 Years

Kouichi NAKAO*

Keywords : geographic, represent

1. はじめに

神戸高専は 2012 年度で創立 50 年を迎える．舞子で 27 年間，学園都市に移転して 23 年間，校地，施設など様々な変化があり現在に至っている．本文は，50 周年を機に，今日までの校地，施設の変遷を，記録として残すことを願って地理情報を中心としてまとめたものである．

2. 六甲工業高校に関する記録

神戸高専は，六甲工業高校を母胎としている．神戸高専の歴史を語るときには，まず，その歴史を述べなければならない．

2.1 六甲工業高校の誕生　　六甲工業高校は 1957 年に，電子工業科，精密機械科，原動機械科，工業化学科の 4 クラスでスタートし，1962 年に建設工業科が設置され，5 クラスとなった．

図１　伯母野山周辺地図

当初は神戸大学西側の伯母野山（図１参照）に校地を求めたが，不調に終わり，他の候補地を探し，最終的には舞子の地に校地を確保した．設立して，舞子の学舎が完成するまでの二年間は兵庫区吉田町にあった神戸工業高校（図２参照）の敷地内の仮校舎であった．

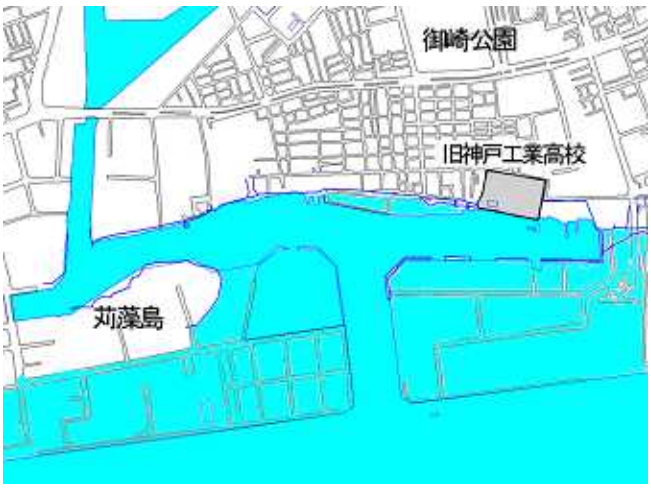

図２　兵庫区吉田町周辺地図

2.2　舞子学舎の竣工と移転　　1959 年 4 月から舞子の地に移転し，3 学年もそろい充実期を迎えた．移転時は，中央実験室のみが堅牢建物で，他は木造平屋であったことが写真１からわかる．

写真１　移転当時の全景[1]

2.3　舞子学舎　　1960 年には東西実験室が完成した．1966 年には平池の埋め立てが終わり，グラウンドとし

＊　都市工学科 教授

て使用できるようになった．この舞子の校地は図３のような丘陵地の端部を造成したものであった．後に北実験室，体育館が建設されたところは谷であったことがわかる．写真２は、図３と近い方向から撮影された1960 年の空中写真である．当時の様子がよくわかる．

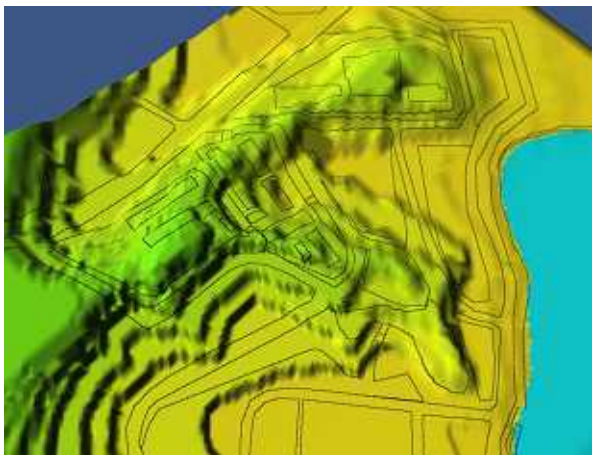

図３　舞子学舎の原地形

写真２　1959 年 12 月の空中写真[2]

図４　1960 年３月の実測図（兵庫工業高校測量）[3]

図４は、兵庫工業高校土木学科が測量実習で作成した図の一部である．これも当時を知る貴重なものである．この図から，校内に一般道が通っていることがわかる．これは高専となってからもしばらく続く状態である．

3. 神戸高専の設立と移転までの経過

神戸市立六甲工業高等専門学校は 1963 年４月に第１回生が入学しスタートした．当然ながら六甲工業高校の２年，３年生と同居であった．六甲工業高校の生徒が卒業し，高専単独となった３年後の 1966 年４月から現在の神戸市立工業高等専門学校に名称を変更された．

3.1 舞子学舎の敷地面積について　　高専としての創立時の記録では，40786m^2（道路を含むと 42770m^2）[1] であると記されている．また，高専となった初年度の 1964 年１月に，面積測定を目的として作成された実測図によると校地 19247.14m^2，グラウンド 20788.79m^2 である．合計すると 40035.93m^2 となる．これには校内の一般道は含んでいない．1989 年の学校要覧には 46000m^2 とあり，グラウンドは 26700m^2 となっており数千m^2 の差がある．20 年の間に敷地に変化があったものと思われるが詳細は不明である．

3.2 高専としての舞子学舎　　図５は，前述の 1964 年１月に，作成された実測図を基に作成したものである．北実験室，１号館ができているが，一般道は校内を通り抜けている状態に変わりはないことがわかる．また，ここには表されていないが，他に木造等の教室が存在していた．

図　５　1964 年１月の舞子学舎実測図

写真３は高専として 10 年が過ぎた頃の空中写真である．グラウンドにはプールがあり，２号館，体育館，食堂・学生ホール，保健室ができていることが読みとれる．しかし，精密実験研究センターはまだできていないことがわかる．私の記憶では，体育館は 1967 年，プールは 1970 年に完成している．食堂・学生ホールの完成は 1972 年頃である．

写真４では舞子での最後の状態を見ることができる．神戸高専はこのような施設を最後として1990年４月に学園都市キャンパスに移転することとなった．

写真３　1973年の空中写真（国土地理院発刊の一部）

写真４　1984年の空中写真（国土地理院発刊の一部）

4.　第２グラウンドについて

高専として開校当時の敷地面積では基準を満たしていなかったため，1963年８月に垂水区舞子町細道石ヶ谷（図６　第二校地Ａ）を取得した．その面積は10721.36m^{2}であった．その後1967年頃には図６ の第二校地Ｂに換わっていた．第二校地Ｂは，創設期のサッカー部の練習場として使用され，初期のサッカー部員の人たちにとっては思いで深い場所だと推測する．私自身も測量実習で平板測量によりその面積の測定を行った思い出がある．

図６　神戸高専舞子学舎の敷地

5.　学園都市キャンパスへの移転

5-1　校地の原地形　　学園都市キャンパスのある地域は，神戸層群が広がる丘陵地帯である．図7の白線に囲まれたところが神戸高専のあるところである．谷を含んで山の部分は削って校地としている．その様子を図8に示している．グラウンドの中央を谷底が走っていて盛土となっているが，他の区域は切土であることがわかる．

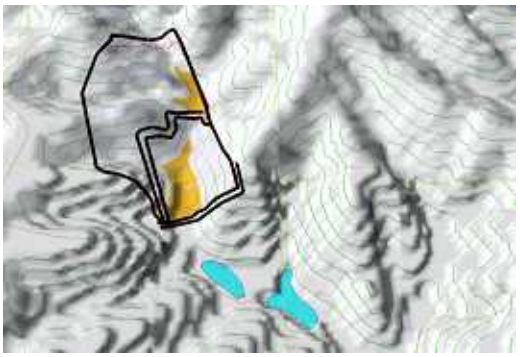

図７　開発前の学園都市キャンパス付近の鳥瞰図

図８　神戸高専キャンパスの造成区分

図９は，1985 年の空中写真を基に作成した東から見た鳥瞰図である．まだ神戸高専の区域の掘削はなされていない様子を示している．

図９　造成工事中の風景

5-2　移転時のキャンパス　　学園都市の新キャンパスは，敷地面積 85,500m^2 あり，南北 400m，東西 300 mである．しかも舞子に比べ，高低差がほとんどなく，敷地を有効に使えるという好条件の地である．グラウンドは南北方向の長辺 206m，短辺 165mであり，東西方向の長辺 130m，短辺 56mである．その面積は約 23700m^2 あり舞子のグラウンドより 500m^2 程広く，しかも舞子はテニスコート，弓道場，プールを含んでいたので，はるかに広くなっている． 写真５はその様子を伝えるものである．

写真５　1990 年の神戸高専キャンパス

5-3　阪神淡路大震災後の神戸高専　　移転から 5 年後の 1995 年１月に神戸を大地震がおそった．神戸市での被害は甚大で，その後の復興に多大の力が必要であった．神戸高専においても様々な対応を余儀なくされたが，比較的早い時期に授業を開始し徐々に平静を取り戻した．写真６は，グラウンドに被災者のための仮設住宅が建っている様子を伝えるものである．また，専攻科棟の建設中の様子もここに写っている．

5-4　現在の神戸高専キャンパス　　図１０は 2012 年の神戸高専の平面図である．専攻科棟ができていること以外，移転時とあまり変わりがないことがわかる．

写真６　1998 年の神戸高専(国土地理院発刊の一部)

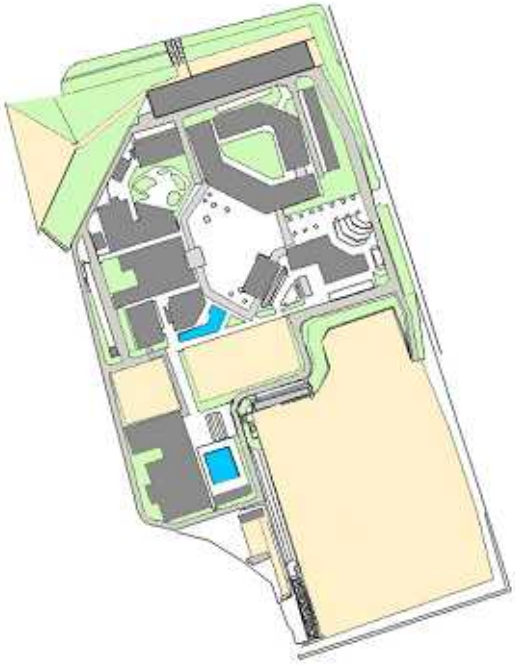

図１０　2012 年の神戸高専キャンパス

6. まとめ

神戸高専が 50 周年を迎える 2012 年に，地理情報としての記録を残したいと考えていた．過去の記憶と資料をたよりに本文をまとめ，一つの記録として研究紀要に掲載することができた．

参考文献

(1) 近藤泰夫：「神戸市立六甲工業高等学校創立五周年誌」，神戸市立六甲工業高等学校，　1963.
(2) 神戸市立工業高等専門学校体育科：「神戸高専体育のあゆみ」，神戸市立工業高等専門学校体育科，1984.
(3) 神戸市立工業高等専門学校情報教育センター：「神戸市立六甲工業高等学校附近実測平面図の電子ファイル化」，神戸市立工業高等専門学校情報教育センター広報，第 17 号，pp. 37-40，2005.